

# Mt.ウトウルンコ・ウユニ塩湖

アルパインツアー

2015年5月30日 ~ 6月4日



Mt. ユトウルンコ

ボリビアの首都ラパスの飛行場は 4000m を超えるところに位置している。すり鉢の形をしたラパス市は、低いところほど高級地になり、我々の宿泊したホテルは 3300m であった。ここがボリビア滞在中の最低地であって、あとはほとんどを富士山よりも高いところで過ごした。

Mt.ウトウルンコは南米のボリビアにあり 6008m の高さを誇っている。しかし全体がアンデス山脈の上であるので 5700m までは車で行って、わずか 300m 登るだけで 6000m をクリアできてしまう。キリマンジャロ (5896m) の場合は、登り 4.5 日で下り 1.5 日の合計 6 日かける。今回のようなまい話には何か落とし穴があるはずだと思っていたが、やはりあった。しかも最悪の形で。約 5900m の地点で、我々のメンバーに死者が出ってしまった。



## 1 首都、ラパス



すり鉢状の街 ラパス

ヒマラヤの山の中にあるルクラ飛行場にしたらって高さは 2800m である。4000m 以上のラパス飛行場は、まさに常識外である。すり鉢状であるので、街の中は坂だらけであって、年取ったら絶対に住みたくない。南米を南北に走るアンデス山脈の真ん中にあるボリビアでは、低いところはジャングル地帯であるので、温度が低く快適さを得られる高所に街ができることは必然であるのかもしれない。普通は、高級住宅街というのは高台にあるものであるが、ラパスの場合は低いところの方に高級住宅街が集まっている。この街には電車はない。乗り合いバスはあるが交通混雑の元になってしまう。そこでケーブルカーが公共交通機関として採用された。オーストリア製の。懸垂式ケーブルカーが公共交通機関になっているのは他に例がないのではないかな。



ラパスのケーブルカー

## 2 高所順応と移動

5月30日から6月3日までは、南へ南へ移動しながらウユニ塩湖を経て Mt. ウトゥルンコへと移動を重ねてゆく。

初日はラパスに拠点をついたまま、名峰コンドリリ（5648m）を見渡す展望ハイキングである。山名はコンドルが羽を広げたような形をした山という意味合いであるらしい。日本でいえば、北アルプスの鷲羽岳だ。私にはコンドルが羽を広げているようには見えなかった。見る角度によるのであろう。前日の空港からホテルまでの道はすり鉢の降りしかなかったのであるが、この日の片道3時間の道の大半はどこまでも平らなアンデスの高原をひたすら走り抜ける。広さを感じるところである。ボリビアは、日本の3倍の面積に1000万人が暮らす国であるという。ほとんど砂漠とジャングルであるので、人が均等に住むことはできずに都市部に集中的に住んでいるということである。

3時間のハイキングということであったが、4000mを超えるところでは息が切れる。道はほとんど平坦であるのに係わらずこんなことでは先が思いやられる。

移動は4台のトヨタ製ランドクルーザーに分乗して行われた。1号車の運転手は、山も含めて現地ツアーコンダクターであるペペさん。2号車はちょっと太めでペペさんの妹のベロニカである。3号車はおじさんという人もいたが、真偽のほどはわからない。これも太目。4号車はペペのお父さん、やはり太目。

メンバーは男7人、女3人の11人。成田で顔を合わせた時に一人

のジイサマと眼が合う。どこかでお会いしていますね、とお互いに言う。こういったときにはかつて登った山を言い合えば思い出すヒントになる。何のことはない、つい2012年のカラパタル・エベレストベースキャンプで3週間近く同室であった喜多方さんだ。この人は5年くらい前に奥さんを亡くされてから海外の山へ頻繁に行くようになったということであるが、何とこの1年で13回目の海外登山であるという。この山が終わった後にもさらに2回の山が決まっているという。2012年の時点では私の方が海外登山では経験豊富であったが、すっかり抜かれたようである。女性の埼玉さんもこの時一緒であったみたいだ。ロッジの部屋が寒いとツアーリーダーに抗議をして、部屋を代えさせたときのことを喜多方さんが目撃していて、外見に似合わぬ強い抗議姿勢にびっくりして覚えていた。後の人は今回初めてであるが、キリマンジャロの登山経験を始めとして、みんな同じようなところに登っている。やはり6000mを3時間というところに引かれた人たちである。







Mt.サハマ

移動の初日は、ボリビア最高峰の Mt. サハマ (6545m) の山麓の部落へ向かう。5時間のドライブである。この日も Mt. サハマを視野に入れながら2時間ほどのハイキングを行う。平坦なところをゆっくり歩くだけであるので、トレーニングをしたという感じにはならない。ロッジの高さは4200mである。ロッジのベッドについているブランケットだけでは寒そうなので、支給されたシュラフも使う。今度は暑くて夜中に剥いでしまった。

移動2日目、サハマを見ながら天然温泉を経る7時間のドライブ。この温泉は標高4300mである。日本で一番高



草を食むリヤマ

いところにある温泉は北アルプスのみくりヶ池の 2430m だって。何ソレ、地の底ジャン。しかし真面目に水着を持ってきて温泉に入ったのは私と愛知の高島のバアサマだけだった。

車窓の外には草を食むリヤマやアルパカの群れがたくさん見られるようになる。このような光景はペルーでも見たがボリビアの方がはるかに多いような気がする。

ランクルでなければ乗り越えられないような川を渡る。ランクルであればこのような場面でも驚くことはない。

このあたりは水が多いが、むしろ珍しい光景である。ボリビアの6月の降雨量は月間3mmであり、砂漠はもちろんのこと街も全体が常に埃に覆われている。適当に雨が降る日本の景色は、森でも町でも美しいのはこんなところに要因があるのかもしれない。



Mt.サハマの温泉



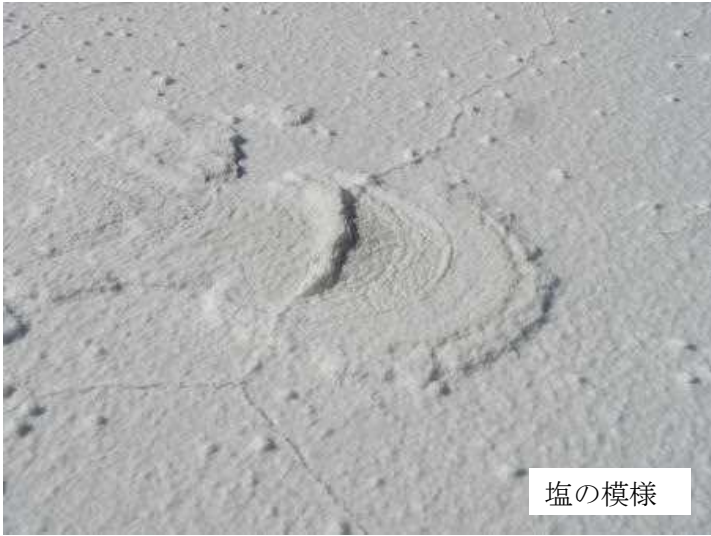
ランクルの川渡り

### 3 ウユニ塩湖



ウユニ塩湖





塩の模様



トリック撮影

移動の 3 日目で、今回の旅のもう一つの目玉であるウユニ塩湖に着いた。四国の半分の面積があるという。大陸の造成期に海であったところが廻りごと持ち上げられて、水分は蒸発した後に塩だけが残ってこのような塩湖になったということである。この時期は乾季であるのでほぼ完全に干上がっているが、1 月等の雨季には表面に水がたまるようであり、この時期のウユニ塩湖も観光としては人気があるそうである。塩の大光景の中でしばし遊ぶ。塩の表面をよく見ると、六角形の模様のようなものが見える。蜂の巣とかキリンの肌の模様など、六角形というものは一番合理的な模様らしい。(何が合理的なのかは NHK のミクリーズという 5 分程度のミニ・シリーズ番組で見たことがあるが、何が合理的であるかは忘れた) この他に諏訪湖の御観渡りに相当するような、その塩の盛り上がりも見受けられた。ペペさんがトリック撮影を披露してくれた。みんななるほどと言っていたが、これの原理もわからなかった。俺ってバカなのかも。

移動の 4 日目、塩湖の中にあるインカワシ島にも寄る。昔インカ人が旅するとき指標としてこの島を目標にしたということである。奇妙なサボテンがいっぱいある。1 年間で 1 cm 位の割で伸びるということで、100 年以上と思えるものが軒並みにある。



インカワシ島



移動 5 日目、フラミンゴが生息するコロラダ湖などを経て、高度 5000m 付近で高所順応のための 1 時間程度の散策を交えて、Mt.ウトゥルンコアッタックの拠点クエティナ・チコ (4200m) へ着く。

ここで現地ガイドのペペさんに加えてこの山のスペシャリストである登山専門のローカルガイドが一人加わった。彼はMt. ウトゥルンコへは 100 回以上の登山経験を持つという。

ちなみに今回の私の血中酸素濃度と脈拍数は右表のようになっていた。まあ、悪くもなければ良くもない。相変わらず脈拍数が少なすぎるのは、酸素が薄い条件下で良くないことだ。血圧が高いので普段から降圧剤を服用しているのであるが、この中の一つの薬に心臓の動きを抑える要素のあるものがあるらしく、日常から心拍数は少ないのである。医者にも文句を言っても取り合ってくれない。

				酸素濃度	脈拍
5月29日					
	ラパス	3300	夜	82	79
5月30日			朝	86	69
	ラパス	3300	夜	87	63
5月31日			朝	89	73
	サハマ	4200	夜	83	71
6月1日			朝	81	69
	タファ	3700	夜	85	58
6月2日			朝	91	61
	ビニャマール	3900	夜	85	65
6月3日			朝	87	67
	クエティナチコ	4200	夜	83	82
6月4日			朝	82	79

#### 4 Mt. ウトゥルンコ

6月4日、いよいよMt. ウトゥルンコへの登頂日である。



双耳峰の真ん中で5700mのコルまで自動車道が付いており、そこから300m登れば頂上のはずである。したがって、登頂日といえども朝は5時起き7時出発である。自動車道はなだらかにつけられており、ひやひやするようなところはない。しかし5000mを超えるあたりまで来ると雪が多くなり、雪が溜まったところではスノータイヤでないランクルは登り切らずに先へ進めなくなる。仕方なしに5500mあたりから歩くことにする。最初は自動車道を進んだ。自動車道は大きな陥没部や雪が凍った部分があったりして、とてもコルまで行けるとは思えない。コルに着く前の途中から山道を探る。山道といってもきちんとした道があるわけではなく踏み跡をたどるといった感じである。ざらざらの砂礫状の地質であり、足は滑り気味で足元に力を入れないと思うように先へは進めなく、無駄な力を必要とする。ローカルガイドに先導されてジグザグに登り続けると、いつの間にか5700mのコルを下に見るようになった。この頃になると遅れ始める人も一人二人と出てきた。私も息継ぎが苦しくなり始めて、鼻







Mt.ウトゥルンコの登山道

呼吸を保つことができなく口が開き気味になる。この時私の二人前を歩いていた戸塚さんの体がゆらりと揺れた。あわてて後ろを歩いていた方南さんが支えたので持ち直したものと思った。しかし次に前へ進もうとしたときに、今度は大きく谷側に体を傾けた。再び後ろにいた方南さんが抱きかかえた。私はただならぬ気配を感じとって、前の方を歩いていたツアーリーダーの本多さんを大声で呼んだ。ただちに本多さんが駆けつけて戸塚さんを少し平らなところに移した。明らかに異常をきたしている戸塚さんを見て、本多さんはすぐに登山の中止を宣言して我々に告げると同時に、ペペさんは連絡とガモバックを取りに車のところに直行し、ローカルガイドは我々を車のところまで引率するように指示し、自分は戸塚さんに酸素を与えたり人工呼吸を始めた。本多さんの“次はご自分で息をして下さい”という声が響く。チラリと見えた戸塚さんの顔は青ざめており生気がない。本多さんと戸塚さんを残して我々は山を降った。何か手伝わなくていいのかなという思いが頭をかすめる。しかし自分も息が上がっている状態で何ができるのだと思って降ってしまった。後で思えば、例えば人工呼吸を15分のうち3分でも代わってあげることができたら、本多さんはその間に他のことを考えることができたかも知れない。でも防災訓練でしか習ったことのない人工呼吸が役立ったかどうかは疑問も残る。何も役立てなかったことに対する腹立たしさを感じる。

自動車道まで降ってしばらく歩くと、ガモバックを背負って戻ってきたペペさんと会う。もう一人の運転手もつれている。ローカルガイドは、我々に車のところまでみんなで帰れるかと確認したうえで、ペペさん達と連れ立って戸塚さんのところへ向かった。

みんなで降っているときに一つ問題が起きた。自動車道が大きく陥没している前後でこれを避けるように車が通った痕跡であろうか。二手に分かれているところがあった。どちらみち下の方で合流するものと思えた。一人が陥没しているが明確な道であるほうを選ぼうとした。別の一人が車の痕跡程度の道が正しいと譲らず、それぞれの方向に進んだ。結

局一緒になったので問題はなかったが、雪山などでは遭難する一つのパターンと考えられる。リーダーを持たないツアー登山の危ない一面に思えた。まあこんなこともあったが一応車のところへ戻ることはできた。

1時間以上待ったであろうか。本多さん達がガモバックに入れた戸塚さんを、ストックで作り上げた担架に載せて降りてきた。もう逝けなくなったということは明らかなようだ。すでに4時半を過ぎようとしていたが、車は山を下りて行った。途中で連絡を受けて登ってきた医者に乗せた車に出会って地元の医者チェックを受けた。目に涙をいっぱいにあふれさせたペペさんと、あくまでの冷静なふるまいの本多さんの姿が印象的であった。遅くなったが予定通りにビリヤマルに着くことはできて、本多さんとペペさんは戸塚さんを運んで医者調べを受けるためにウユニの街へ行った。

戸塚さんは成田で最初に顔を合わせた時からマスクをかけていて神経質そうな一面を覗かせていた。亡くなる直前ですらマスクをかけていた。もしかしたら標高6000m近くの酸素の薄い状況で、これが悪い影響を与えたのかもしれない。前日の夕食の時に戸塚さんと私とは偶然に隣どうしの席になった。雑談の中で英語が堪能な戸塚さんに対して、山以外でも海外へ行くことがあるのですか？と聞くと、ヨーロッパへオペラ鑑賞に行ったときの話を話してくれた。この時は奥さんと一緒ということで“アイーダ”を見た時のことで、パソコンによる手配によって数千円でチケットを入手できたという。その他ホテルや飛行機の手配もすべてパソコンから自分で手配したといていた。私もだいぶ昔のことになるが、東京文化会館で行われたメトロポリタンオペラ劇場の“リゴレット”をD席なのに40000円で購入した話などをして、その対比に話が盛り上がった。

50年以上にわたる私の山経験の中には、私自身の滑落や急な発熱でヤバかったこともある。こんなことに対して人間簡単には死なないものだという思いがある。逆に、50年以上にわたる山経験の中には何人かの山友達を亡くしてもいる。こんな時には人間死ぬときはあつけないものなんだと思わされる。今回もその経験を一つ増やしてしまった。

## 5 その後の行程

その後の行程は、ラパスの街への帰り道の間にある“奇岩”や砂漠の中の“汽車の墓場”などを見物しながら当初の予定通りに進んだ。

奇岩は、ゴジラに見えたりスヌーピーに見えたり、人によって勝手にいろいろな想像をする。

汽車の墓場は、いろいろな



産業廃棄物の墓場として紹介されたが、目立つのは汽車の姿である。なぜここに汽車の墓場があるのかは理解できなかったが、ボリビアはかつて鉱山で賑わったようで今でも鉄道線路が長く延びている。ただし現在は観光目的が主流のようである。

ウユニの街の近くのコルチャニにある塩のホテルに泊まる。壁・天井・ベッドからアクセサリ類に至るまですべて塩でできている。雨が極端に少ないからこんなものが可能なのであろうが、地球温暖化の影響かなんかで、この地域に大雨なんかが降ったらみんな溶けちゃうだろうな。

ラパスでラム酒の 10ビンを仕込んできていた八幡東さんが前日来、飲みましょうよと誘ってくれたので当然乗ることにした。感心なことに、Mt.ウトゥルンコから降りるまでは手を付けなかったようである。まだビンの封が切っていない。塩のホテルでは、今回の最高齢者で 75 歳の緑さんというジイサマも引っ張り込んで饗宴となったが、緑さんがガラ系携帯でメール打ちに夢中になって、これに八幡東さんも乗ってしまったので、大半は私の胃と腸を経由してボリビアの排水の仲間と化していった。



汽車の墓場



塩のホテルの壁とベッド



塩のホテルの壁とアクセサリ



ボリビアでの最終日には、ラパスに戻って世界遺産のティワナク遺跡の見学まで行って今回の旅のフィナーレとなった。

## 6 メンバー

3時間で6000mに引きつけられてきた今回のメンバーはケッコウアクの強い人が多かった。

喜多方さんは、5年ほど前に奥さんを亡くしたことがきっかけで、海外登山に没頭していることはすでに紹介した。車の中で高所における呼吸法の話になった時のことである。彼は呼吸なのであるから吸うことに重点を置くべきであるという。一般論としては吐くことに重点を置けば吸う方は勝手に入ってくるとされている。長い間吐くことで高所経験を積んでいる私も譲る気はないので話題を代えようとする、いつまでもしつこくこだわってきてヘキヘキとさせられた。

方南さんも数年前に長い病の奥さんを亡くされている。炊事・洗濯・掃除などを苦にされないようであり再婚など意に無し。このメンバーの中では一番若そうな部類に属するが態度は諸先輩に対してもデカイ。テキパキとした日常姿勢はかつて仕事も良くできたことを覗かせせるが、エラソーな態度は鼻に付く。

高津さんはこのメンバーの中では一番英語力に長けている。若いころに仕事上必要とされたらしい。写真好きで走る車の中でさえ常にカメラを構えている。一番の良識派だった。

北九州の八幡東さんは高校と大学の途中まで山岳部。しかし今はデルバラで登りでは息が荒い。土産物屋の大得意で、露点から飛行場まで各所の売り子を喜ばせていた。

同じく九州の八代さんも土産物屋のお得意さんだ。おそらく金額と量においてナンバー1であったろう。南米的なポンチョなども購入していたがよく似合っていた。

大阪のオバちゃんの西成さんは、年1回のペースの海外登山というが、経歴が長いので私が行ったようなところはすべて行っている。海外はアルパインツアー、国内は大阪の毎日新聞旅行ということで、行動パターンは私と似ている。

高島さんは、ある程度年取ってからお姉さん達と山に登るようになったという。周りの人が何をやっていようと自分の感覚でやろうと思ったことをやる、という感じで人の意向など意に介さない。同室の大阪のオバちゃんはカッカとしていたがこれも意に介さない。

埼玉さんも孤高を保つダイブの女性である。他の女性とは離れてポツンと一人であることが多い人であるが、今回はケッコウ明るかった。写真に納まるときには片手をあげて案内をするようなポーズをとる。昔はかわいい子ちゃんに通っていたのかもしれない。



ティワナク遺跡

75歳で最年長の緑さんは、このツアーの最初のうちは下痢だとかで体調も悪く、歩く時も遅れ気味であった。しかしMt. ウトゥルンコ登頂近くになって、“体調はどうですか？”と聞かれると、“イマイチと言いたいけど宇都宮あたりかな”などとオヤジギャグで応答するくらいになっていたのも、だいぶ取り戻していたのであろう。

